

II 29-16 混合飼料中の粗飼料源の違いが搾乳ロボットへの進入回数に及ぼす影響

○小櫃 剛人¹・杉野 利久¹・沖田 美紀¹・黒川 勇三¹・磯部 直樹¹・川村 健介²・森田 茂³

¹広大院生物圏・²広大院国際・³酪農大農食環境

tobitsu@hiroshima-u.ac.jp

【目的】搾乳ロボット飼養では、搾乳室への乳牛の進入増加が乳生産向上につながると期待されるが、搾乳室への進入回数の制御方法は確立されていない。本報告では、混合飼料(PMR)中の粗飼料源による搾乳室への進入回数の変化を検討した。【方法】フリーカウトラフィック型の搾乳ロボット牛舎(泌乳牛 25 頭)を用いた。最初にコーンサイレージ主体 PMR(TDN 含量 70%)を 21 日間(1 期)、次いで牧草サイレージ主体 PMR(TDN 含量 69%)を 20 日間給与(2 期)した後、再び 1 期と同じ PMR を 18 日間給与(3 期)した。PMR は、各個体の TDN 要求量に応じた量を個体識別飼槽に給与した。搾乳時の濃厚飼料は乳量に応じて最大 7 kg/日とし、最大搾乳回数は 1 日 3.5 回とした。各期 7 日間の搾乳室への進入状況について解析した。【結果】乳量には試験期による違いはなかったが、進入回数および搾乳回数は 1、2 期に比べて、3 期で少なかった。1、3 期では 2-4 回進入牛が多かったのに対し、2 期では 4-6 回進入牛が多く、深夜や夕方での進入頭数が増加する傾向にあった。2 期では、個体ごとの濃厚飼料給与量と進入回数との間に正の相関がみられた。以上から、牧草サイレージ主体 PMRの方がコーンサイレージ主体 PMRに比べて、搾乳室への進入を促しやすいことが示唆された。